

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

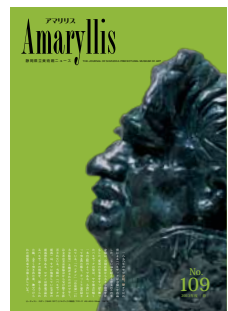


一八九八年のサロンに、ロダンは石膏による《バルザック記念像》を出品した。二七〇cmを超える背丈のこの単身像は、公開直後から大きな物議をかもしました。愛用の仕事着をすっぽり被ったバルザックの姿は、やや後方に傾く一本の石柱のようである。大食いによって突き出た腹も、そっくり包み隠されている。「ペンギン」「石炭袋」「巨大な胎児」と酷評されただけでなく、注文者の文芸家協会から受け取りを拒否されている。当館の《バルザックの頭部》は、すでに他界していた文豪の頭部習作である。ロダンは創造力溢れるバルザックの相貌を、深くえぐられた眼、大きく突き出た鼻、撫でつけられた頭髪の束で力強く表している。

No.
109
2013年度 | 春 |

バルザックの横顔とともに

―新装版発刊にあたって



薄みどりの地にロタン作「バルザック」の大きな横顔を見せて、『アマリリス』の新装版が発足する。

この静岡県立美術館の広報誌は、一九八六年の本館創立とともに発刊され、一年に四回刊行を守って、すでに二十七年目に入り第一〇九号に達した。私自身はまだ試みていないが、全号をまとめて通読してみた

ら、本館の特別展示の積み重ねや、建てものの増幅や、人事の出入りや、普及活動と研究動向の多様化など、美術館史のさまざまな側面が浮かび上ってきて、さぞかし面白いことだろう。

『アマリリス』は県民および全国の美術愛好家に向けての本館活動の広報とともに、右のような本館の発展の記録という役割をも担っている。新装版の発刊とともに、

この二つの使命をあらためて自覚しよう。

広報は広く読んでもらわなければならない。出るのを待ちかねて読んで下さる人がいるような面白い内容にもしたい。そのため、この第一〇九号から誌面をすべて縦組みに変えた。従来の横組みというのは、理系の論文などは別として、戦後日本の企業・お役所の便宜主義の所産にすぎない。読ま

れなくてもよい、出てさえいればよい、というような公文書の類である。近年ではそれにIT技術への隷従の心理も加わった。この惰性的横組みの心理を脱けて、書きやすい、そして読みやすい縦組みの日本語に立ち返ろう。もともと日本語は、漢字、ひらがな、カタカナの字の形からいっても、縦に書き、縦に読むようにできているではないか。

清少納言の、芭蕉の、漱石の文章は、横組みに引用するだけでも、読みにくくなるばかりでない、滑稽にさえなる。つまり文化破壊となる。

『アマリリス』も、この本来の、天然の日本語文にもどろう。それだけでもこの広報誌をさらに多くの人々に向かって開放することになる。同時にこれを館内から外への活発な発信機関とするだけでなく、館外からのさまざまな声の受信器としてもゆきたいものだ。やがて富士山の世界遺産への登録がある。徳川家康没後四〇〇年の大行事があり、ロタン館開設二十周年の企画もある。美術館としてそれらのすべてに積極的に対応し、対応することによって『アマリリス』をさらにも充実させてゆこう。

(館長 芳賀 徹)

美術館への思い



飯田 真

三月、平成二年（一九九〇）より勤務した静岡県立美術館を退職しました。美術館の胎動期から発展期にかけ、学芸員として作品収集・保存や研究活動、展覧会の企画運営、教育普及などに携わりました。

思い起こせば、赴任当時は、時代も美術館界も熱を帯びていました。当時、思っていたのは、静岡県立美術館をよりよい美術館にすること。それが、静岡の文化向上のためになり、ひいては日本の文化向上に寄与するということでした。それから二十三年、美術館を取り巻く環境も変わり、成熟期を迎えています。当初の目標がどれだけ達成できたか、少しは貢献できたのか、自問自答するこの頃です。転換期を迎えた美術館、時代にあった今後の発展を期待しています。

(前学芸課長)

コラージュ 切り絵 テンペラ画

2013年2月9日(土)~11日(月・祝)

実技室では、昨年度に引き続き、静岡県出身の切り絵アーティスト福井利佐さんをお願いして、小学生以上を対象とした「工作アトリエ」(コラージュで枯れ木に花を!)と中学生以上を対象とした「実技入門講座」(切り絵線で遊ぼう〜富士山編〜)を行いました。

「工作アトリエ」では、美術館にひと足早く春の花を咲かせようと、美術館で開催されたポスターやチラシを材料にして、講師が用意した桜の花やつぼみの型紙を使い、ポスターの色や形を生かしながら、思い思いの作品を作りました。室内の壁に色画用紙で作った枯れ木が、参加者がつくった花やつぼみの作品で次々と飾られて春の



花満開となりました。鑑賞の時間は、一人ひとりが、自分の作品を紹介し、講師を始め参加者全員がお互いの作品のよさをほめ合う講座となりました。

「実技入門講座」では、收藏品展「富士山の絵画二〇一三」にあわせて、テーマを富士山としました。まず、中心に富士山を描いたマス目の用紙の周りを、風や雲をイメージする曲線や楕円を参加者が交代で描き込んで下書きをしました。次に用紙を30のパーツに分割し、各自下書きの線をもとに白と黒の部分を決めて切り絵の作業を行



い、最後に元通りに並べてひとつの作品にする共同制作を行いました。細かい作業ながら、皆さん黙々と取り組み、白と黒の作品にトータルカラーを使って色味を加えることで、富士山作品の世界感がさらに深まりました。鑑賞では、全員の作品を並べて見ると、制作中は気づかなかった隣同士の作品とのつながりが発見でき、共同制作の楽しさを味わうことができました。

「技法セミナー」では、静岡県生まれの画家今村友宣さんを講師にテンペラ画講座を行いました。約七〇〇年前から西洋で広く行われてきた絵画技法で、卵を顔料に混ぜて絵を描きました。スライドを使った講義と体験を交互に行い、午前中は、テンペ

ラ画の歴史や技法について学びながら箔の置き方や刻印を体験。午後は、卵の黄身を指先でつまんで黄身だけを取り出すやり方も学び、実際に黄身を顔料に混ぜながら模写を行いました。初めての体験に参加者は驚きの声をあげながら取り組み、休憩時間もメノウ棒で箔を磨いたり講師に熱心に質問したり、講座翌週の「創作週間」期間中に残った絵の具を使って制作を続けたりする方がいて、参加者にとって魅力的な講座となりました。

(前学芸課主査 伴野 潤)



草間彌生

永遠の永遠の永遠

YAYOI KUSAMA Eternity of Eternal Eternity

2013年4月13日(土)～6月23日(日)

草間彌生——今日、世界的活躍の目覚ましい日本を代表する現代美術家です。そして、今回静岡県立美術館で開催されるのは、この草間の最新の創作活動を紹介する展覧会です。

幼少期の幻覚体験が基となり、十才頃から絵を描き始めた草間は、以降、網目や水玉のパターンが無限に増殖する作品等を作り続けてきました。一九五七年からは十五年間にわたりニューヨークで活動。現代美術の最先端の表現を生み出す作家として、世界的注目を集めるようになります。また、絵画のみならず彫刻やパフォーマンスへと表現の領域も広げ、それぞれの領域で独自の活動を展開してきました。

二十一世紀をむかえ、美術界での草間の評価はまさに不動のものとなり、世界中で多くの人々を魅了しています。その草間が今、驚異的な創作意欲を傾けて取り組む新たな絵画シリーズがあります。二〇〇九年に開始した『わが永遠の魂』です。子どものように自由に楽しい想像力に溢れつつも、人間の内面をえぐるかのような、これまで見たこともないこの作品群は、もちろん本展で紹介されます。初公開となる新作も展示される予定ですので、見逃せません。この『わが永遠の魂』の色彩豊かな世界と対照的な出品作となるのが、五十点からなる『愛はとこしえ』の連作です。二〇〇四年から三年間で描き上げたモノクロのドローイングを基にしたシルクスクリーン作品で、無限に湧き出る連鎖的なイメージを、魔法のようなタッチで描き出しています。

これらの平面作品に加え、本展ではさらに、新作の彫刻作品なども展示されます。《大いなる巨大な南瓜》などの彫刻や、光と水と鏡によるインスタレーション《魂の灯》といった作品は、草間の豊かな創造性とジャンルの枠を超えた壮大な表現世界とを伝えてくれることでしょう。

草間彌生という、希有な才能に恵まれた芸術家の最先端の挑戦を紹介する本展。エネルギーに満ちたその活躍を、ぜひ目撃して下さい。

(上席学芸員 三谷理華)



《愛はとこしえ [TAOW]》(『愛はとこしえ』より) 2004年
©YAYOI KUSAMA, Courtesy of OTA FINE ARTS.



《花園にうずもれた心》(『わが永遠の魂』より) 2009年
©YAYOI KUSAMA, Courtesy of OTA FINE ARTS.

Information

○特別講演会 「草間彌生の世界」

講師：建畠哲氏 (京都市立芸術大学学長・埼玉県立近代美術館館長)
日時：4月27日(土) 14:00～15:30
会場：当館講堂
*申込不要、無料、先着250名様まで

○映画上映会 「草間彌生 わたし大好き」

(2008年日本、102分、監督：松本真子)
日時：5月11日(土)、18日(土) いずれも14:00～
会場：当館講堂
*申込不要、無料、先着250名様まで

○学芸員によるフロアレクチャー (作品解説)

日時：4月28日(日)、5月19日(日)
いずれも14:00より30分程度
集合場所：企画展第1展示室
*申込不要、観覧料が必要です。

○「こどもワークショップ ヤヨイちゃん夢の旅日記」

日時：5月3日(金・祝)
午前の部：10:15～12:15 午後の部：13:30～15:30
会場：当館実技室
対象：小学生以上 (小学校3年生以下は保護者と参加のこと)
*無料、事前申込必要 (申し込みの受付は終了しました)、各回25名様まで。

○ちょこっと体験

「ぬりえちょこっと体験 ヤヨイちゃん夢の旅日記」
日時：5月8日(水)～10日(金)
各日：10:00～12:00、13:00～15:00
会場：当館エントランス (予定)
*申込不要、無料、定員無。

各イベントの詳細は、当館ウェブサイトをご覧ください。

夏目漱石の美術世界展

2013年7月13日(土)～8月25日(日)

夏目漱石(一八六七―一九一六)は、千円紙幣に肖像が採用されるなど、日本でもっともよく知られた文学者の一人です。英文学者として一九〇〇年から一九〇二年にかけてロンドンへ留学、帰国後に小説家として活躍を始めました。『坊っちゃん』、『草枕』をはじめ、『三四郎』、『それから』、『門』、『こゝろ』など多くの名作によって、今日では近代日本を代表する文豪、また国民作家として、国内外で親しまれています。

これまで、漱石に関しては幾度か関連する展覧会が開催されました。また漱石文学が、同時代の日本美術やイギリス美術と深く関わっていたことは多くの研究者が指摘するところですが、実際に関連する美術作品を展示し、漱石が持っていたイメージを読み解こうとする試みは、これまでにはありませんでした。

今回の展覧会は、漠然と漱石の時代の美術を概観するのではなく、漱石の文学作品や美術批評に登場する画家や作品を可能な限り集めてみようという初めての試みです。いわば、漱石を案内役として古今東西の美術作品を鑑賞しようというものです。そのことよってターナー、ミレイ、ラファエル前派、青木繁、黒田清輝、あるいは横山大観、安田靉彦といった近代日本の作品を捉え直す機会となればと考えています。

また漱石と同時代に生き、深い交友をもった画家たち、浅井忠、中村不折、橋口五葉、津田青楓による装幀や挿図など、当時流行したアール・ヌーヴォーを取り入れたブックデザインを紹介します。

そして漱石自筆の作品。漱石が自分でも好んで絵筆をとったことはよく知られていますが、その多くは南画山水でした。漢詩の優れた素養を背景に描かれた文字通りの文人画から、漱石が自ら描いた理想の絵画世界を探ります。

このほか、漱石が所蔵していた美術書、カタログなどの資料紹介、あるいは漱石没後にその文学作品をイメージソースとして制作された絵画などによって、漱石の美術世界の全貌を明らかにします。

(上席学芸員 泰井 良)



夏目漱石《山上有山図》
1912年 紙本着色 岩波書店



夏目漱石『こゝろ』装幀画稿(扉1)
1914年 墨・紙 岩波書店



ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス
《人魚》
1900年 油彩・カンヴァス 王立芸術院、ロンドン
©Royal Academy of Arts, London; Photographer: John Hammond



青木繁
《わだつみのいるこの室》
1907年 油彩・カンヴァス
石橋財団石橋美術館

ロダンとコラン

ロダン美術館の文書が物語る芸術家の交友

オーギュスト・ロダン（一八四〇—一九一七）とラファエル・コラン（一八五〇—一九一六）。近代彫刻の礎を築いたとされる彫刻家と日本近代洋画に大きな影響を与えたとされる画家である二人のフランス人芸術家は、一見、何の関わりも無いかに思われる。だが、彼らの間には、少なくとも交友関係は存在していた。現在、ロダン美術館資料室に保管されるロダンに宛てた六通のコランの書簡、あるいはメッセージを書き込んだ三枚の名刺は、このことを確かに裏付けている。これらのうち日付があるのは書簡四通だが、いずれも一九二二年から一九二三年と、二人の美術家の晩年にあたるものとなる。また、これらの資料は、この頃彼らを取り巻いたさらなる交友関係をも垣間見せている。

例えば一九二二年十一月十一日付の書簡でコランは、友人である「シエッサ夫人」と「パロ医師」がアフロディテの大理石小像を持っていくのを見てやって欲しいと、ロダンに依頼している。コランの二人の友人のうち、「シエッサ夫人」とは、ピエール・ルイス（一八七〇—一九二五）の著作にコランが挿絵原画を提供して一九〇六年に出版された挿絵本、『ピリテイスの歌』の版画家、C・H・シエッサの配偶者である。また同じ書簡でコランは、アメリカ人美術品蒐集家で上院議員も務めたウィリアム・A・クラーク（一八三九—一九二五）についても触れているが、クラークもコランも古代ギリシアのタナグラ人形を蒐集するといった趣味を共有していた。これらの点から推察するに、コランとロダンの交友は、古代ギリシア趣味を共有する一連の人脈へと繋がっていったとも思われる。

ところでクラークは、コランの別のロダン宛書簡にも登場する。例えば、一九一三年八月二十日付の書簡の訳文を以下に記してみる。

一九一三年八月二十日水曜日
親愛なる友

クラーク氏に手紙を書き、貴方の心からの言葉を伝えておきました。今朝、シエ・ラヴニユで、貴方とお会いしお話しでき、大変嬉しゅうございました。

このような喜びに再び浴するのは、少し後のことになるでしょう。明日私はロンドンに発ち、少しばかりの気晴らしや気分転換をさせていただきます。

九月の初めには戻ってきます。敬具

R コラン

この書簡でコランは、自身のロンドン行きをロダンに伝えてもいる。アンリ・フォション（一八八一—一九四三）は、リヨン美術館館長在任時の一九一七年にコランの陶磁器コレクションを一括購入に乗出した際、「彼「コラン」は、主にロンドンで「蒐集品を」買っていたと私は思



図1 年代不詳「ダンヴィエのバスティアン＝ル＝バージュ記念像」(Marie Lecasseur, (Jules Bastien-Lepage l'homme de la Meuse) [Jules Bastien-Lepage [cat.exp.], Paris, Musée d'Orsay, 2007, pp.53-58] より転載)

っていた」と報告書に記したが、コランの言うロンドンでの「気晴らし」には、極東の美術工芸品の買い物も含まれていたのだろうか。

このように、ロダン美術館に残されたコランのロダン宛書簡からは、晩年を迎えていた二人の美術家の交友に連なる人脈の様相や彼らの動静を、ささやかながら読み取ることができ

ではそもそも、ロダンとコランの交友はいつ頃から始まったのだろうか。明確な時期は不明である。ただ、きっかけであったかは判然としないものの、少なくとも親交を深める機会となったことには疑いの無い出来事がある。天折の画家を悼んでその故郷ダンヴィエに設置された、『バスティアン＝ル＝バージュ』像(図1)を巡る一連の動きがそれである。ロダンの作であるこの像の製造番号「N. 512」のものは、静岡県立美術館のロダン館に展示されている。ジュール・バスティアン＝ル＝バージュ（一八四八—一八八四）は、外光を取り入れた自然主義の画家としてサロンなどで活躍していたが、三十代の若さで病魔に倒れた。散り急いだ才能を惜む人々は、画家の故郷に記念像を設置する動きを開始。ジュールや弟でやはり画家であり建築家であったエミール・バスティアン＝ル＝バージュ（一八五四—一九三八）と旧知であったロダンが、その制作を請け負った。この記念像設置に係る文書や書簡類もロダン美術館に残されているが、そのうち一八八五年三月三十一日付のロダン宛書簡(図2)で、エミールは次のように記している。

一八八五年三月三十一日

親愛なるロダン

兄の友人の幾人かが、兄に捧げるべくダンヴィエに記念碑を設置するという希望を、私が表明することを望みました。

四月三日金曜日午前十時に、ファルスブ

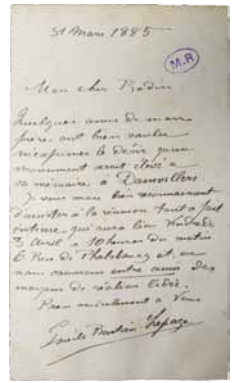


図2 エミール・バステイアン＝ルバージュの1885年3月31日付ロダン宛書簡(ロダン美術館蔵)

ール通り六番地「エミールの自宅」で行われるごく内々の集まりに、貴方が出席して下さればありがたく存じます。構想実現の手だてについて、友人の間でお話ししましょう。 敬具

その後、一八八六年二月八日に「バステイアン＝ルバージュ記念像設立委員会」の一回目の会合が持たれたことが、同月六日付のフランス美術家協会会長の書簡の記載によりわかる。

この記念像設立の経緯を伝えるロダン美術館の文書類の中には、ロダンのみならず、コランの名前も登場する。コランは、ジュール・バステイアン＝ルバージュの竹馬の友であり、カパネルの同門でもあった縁である。作成の日付は記されていないが、「バステイアン＝ルバージュ記念像設立委員会」名簿(図3)には、エミールやロダンとともに、コランの名前も末尾に確認できる。また、一八八七年六月七日に開催された同委員会において、画家バスケル・ダニヤン＝ブーヴレ(一八五二―一九二九)や批評家リュド・フル



図3 「バステイアン＝ルバージュ記念像設立委員会」名簿(ロダン美術館蔵)

コー(一八五二―一九一四)、ロジェ・マルクス(一八五九―一九一三)、そしてコランが、実行委員会メンバーに任命されたと伝える日刊紙記事等も保管されている。さらに、医師でありムズ県選出の代議士でもあったアンリ・リウヴェイル(一八三七―一八八七)がロダンに宛てた日付の無い書簡には、次のように記されている。

月曜日十時
親愛なる友

お目にかかれず大変残念です。本日月曜日十時頃の夕べを過ごして下さるものと期待しております。ダルー、私の弟、ラファエル・コランが一緒です。写真を二枚お撮りしました。本日、貴方のブロンズを铸造のためにお貸しします。

アンリ・リウヴェイル
ヒルトン「？」嬢と文通していたデュ・ザムラール「？」の埋葬に参ります。

リウヴェイルはロダン、コランとともに、バステイアン＝ルバージュ記念像設立委員会のメンバーであった。またこの人物の没年は一八八七年であることを考え合わせると、恐らくこの書簡は、記念像設置をめぐって三人が接触もっていた時期のものではないかと思われる。いずれにせよ、ロダンとコランは、リウヴェイルのような第三者を媒介にしていたことだったかもしれないが、一八八〇年代という比較的若い時代から、すでに私的な時間と空間をともにすることがあったと考えられよう。

バステイアン＝ルバージュという自然主義の画家を媒介にして若き日の親交を深め、晩年には古代趣味を共有する人脈へと連なっていたロダンとコラン。今日少々奇妙に思われるが、当時において古代ギリシア趣味と日本趣味はしば

しば重なり合うものと捉えられていたことにも鑑みれば、一見無関係に思われるこの二人の美術家が、様々な点で知的あるいは芸術的好奇心を共有していたであろうことがうかがわれる。すでに歴史に刻まれた美術家の思わぬ横顔を生き活きと甦らせ、その芸術世界へのさらなる関心を喚起する不思議な力が同時代の文書資料にあることを、ロダン美術館に保管される資料類は改めて示している。

(三谷理華)

- 1) 上の書簡(Lettre de Collin à Rodin datée du 11 novembre 1912 [Archives Musée Rodin, Dossier «Raphaël Collin COL-1421】)は、次の拙著で翻訳とともに原文を紹介した。
三谷理華編著『ラファエル・コランの挿絵版画』展覧会リーフレット、二〇〇八年、福岡市美術館。
- 2) この点については、次の拙稿でも言及した。
三谷理華「覚書―コラン、ギリシア、そして日本」前掲註1「ラファエル・コランの挿絵版画」、二二頁。
- 3) この書簡の原文は、次の整理番号で保管されている。
Lettre de Collin à Rodin datée du 20 août 1913 [Archives Musée Rodin, Dossier «Raphaël Collin COL-1421】。
- 4) Henri Focillon, «Rapport sur la collection de céramique extrême-orientale du peintre Raphaël Collin» [Archives Municipales de Lyon 1400 wp 007]。
- 5) ダンヴィエの《バステイアン＝ルバージュ》像設置経緯の概略については、次の論考を参照。
Marie Leconteur, «Jules Bastien-Lepage l'homme de la Meuse», *Jules Bastien-Lepage* [catexp.], Paris, Musée d'Orsay, 2007, pp.53-58。
- 6) この書簡の原文は、次の整理番号で保管されている。
Lettre de Emile Bastien-Lepage à Rodin datée du 31 mars 1885 [Archives Musée Rodin, Dossier «Emile Bastien-Lepage BAS-433】。
- 7) Lettre du président de la Société des Artistes Français datée du 6 février 1886, destinataire inconnu [Archives Musée Rodin, Dossier «Emile Bastien-Lepage BAS-433】。
- 8) Liste de membres du Comité pour l'érection du monument à Jules Bastien-Lepage [Archives Musée Rodin, Dossier «Emile Bastien-Lepage BAS-433】。
- 9) Anonyme, «Frais Divers», *Le Temps*, le 8 juin 1887 [Archives Musée Rodin, Dossier «Bastien-Lepage Presse 1887-1889】。
- 10) Lettre de Henri Louville à Rodin sans datation [Archives Musée Rodin, Dossier «Henri et Marie Louville LLO-3918】。
- 11) 例えば、次のような論考が発表されていた。
Edmond Potier, «Grèce et Japon», *Gazette des Beaux-Arts*, 1^{er} août 1890, pp.105-132。

本の窓 須賀敦子全集(第一巻) 「ミラノ 霧の風景」



著者の須賀敦子(一九二九―一九九八)は、数年のフランス留学の後、イタリアに移り十三年間居住。イタリア文学者であると同時に、エッセイストとしても広く活動しました。語感の鋭さは天性のものですが、気さくで飾りのない人柄は、つねに庶民的な雰囲気漂わせていました。本書の表題となった「ミラノ 霧の風景」はとても味わい深い文章ですが、ナポリの庶民生活をモチーフにした「ナポリを見て死ね」も愉快です。このエッセイの舞台となっているのは、ナポリを真つ二つに区分する狭い街路スバック・ナポリです。この地区での実生活に基づく本エッセイは、ナポリ人固有の気質やナポリならではの混乱錯綜した光景を描き出しています。

(学芸部長兼学芸課長 小針由紀隆)



美術館は私の居場所

静岡県庁 文化政策課班長 高橋由利子

「堂々としている」それが、私の県立美術館への第一印象でした。一九八六年、開館記念展「東西の風景画」に訪れた時のことです。

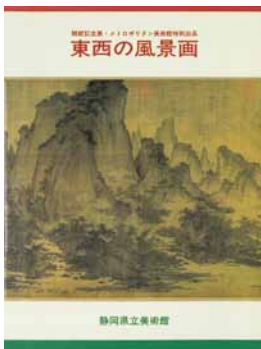
当時、都内に居住し、様々な展覧会に気軽に出席していたにも拘らず、以後、県美の全ての企画展に通い、作品を見る目の基礎を養ってきました。

例えば、一九九〇年の「静物」展。西洋絵画から写真に至る広範な作品群に心動かされながらも、特に、江戸期の一種異様な印象を与える「静物」に惹かれていくきっかけになりました。また、静謐さと瞑想しているような水差しや瓶の描写が印象に残り、その後、京都国立近代美術館の「モランディ展」へも足を運んでいます。

影響力が大きかった展覧会といえ、二〇〇九年の「朝鮮王朝の絵画と日本」が思い浮かびます。それまでは、李朝の陶磁に関心を持ちながら、「朝鮮絵画」を意識することはありませんでした。会期初めに早速出掛け、同日に講演も聴いて俄然面白くなり、計三回見ています。

それ以来、他館で山水画を見ると、キャプションを読む前に、樹木の枝ぶりや岩山の描写に目を凝らし「ひょっとして朝鮮中期？」と当たりをつける楽しみを覚えました。

このように、県立美術館は、私にとって美術鑑賞のベースキャンプであり、四半世紀を経てもなお、くめども尽きぬ狸々の酒壺です。
世代を超えて多くの人々が、美術館を「私の居場所」と感じられれば、こんなに素敵なお仕事はありません。



東西の風景画



朝鮮王朝の絵画と日本



静物

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
*4月27日から6月22日の間の土曜日：10:00～20:00(展示室への入室は19:30まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

電話番号・サービス：054-262-3737

ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

無料託児サービス

毎週日曜日および祝日10:30～15:30

対象 6ヶ月～小学校就学前



風景とロダンの 静岡県立美術館

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742

展覧会年間スケジュール

4月13日(土)～6月23日(日)

草間彌生 ー永遠の永遠の永遠ー

7月13日(土)～8月25日(日)

夏目漱石の美術世界

9月7日(土)～10月20日(日)

世界遺産登録記念(仮)

富士山の絵画

10月29日(火)～11月15日(金)

ふじのくに芸術祭2013

11月22日(金)～1月19日(日)

静岡県立美術館所蔵

二見影一展

2月1日(土)～3月23日(日)

グループ「幻触」と石子順造 1966-1971

～時代を先駆けた冒険者たちの記録～

ムセイオン静岡・富士山世界文化遺産応援シンフォニー

マウント・カルチャー∞

名画・山水8つの視点

富士山の世界文化遺産登録を視野に、ムセイオン静岡が全8回の連続講座を開講します。

6月22日(土)15:00～17:00 会場：静岡県立大学小講堂

芳賀 徹 静岡県立美術館 館長
日本文化としての富士山ー詩歌と絵画の中の靈山

7月27日(土)15:00～17:00 会場：舞台芸術公園「楯円堂」

立田 洋司 静岡県立大学 特任教授
オリンポスとオリエントの聖山

詳細については美術館・総務課までお問い合わせください。

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。